

神戸大学の赤木和重先生のWeb連載を読んで、とても共感しましたので、ご紹介したいと思います。

(かいつまんで引用させて頂いていますので、興味のある方はぜひ、インターネットで原文をご覧ください。)

自閉症スペクトラムと知的障害があり、多動傾向のカズホくん(仮名)に、担任の先生が算数の問題を出していました。問題は「 $13+8$ は？」でした。先生としてはできると思って出したのですが、カズホくん、答えにつまってしまいました。

皆さんが担任の先生なら、このときどうしますか？

多くの場合、「21」という答えを導くためのヒントを教えるのではないのでしょうか？ $8+3$ に分解して考えさせたり、積み木を使って具体的に考えさせたりなどです。そして、万策尽きれば、「に、に、にじゅう……」と、それ数字当てゲーム？ みたいな声かけになるかもしれません。私も、当たり前のように、どういうヒントがいいかな……と考えていました。

ところが、担任の村上公也先生は違いました。興奮して、「そうや、それが考えるってことや！よう考えてるなあ」と、カズホくんに声をかけたのです。

私は「エッ！」と思う同時に、ハッとしました。答えにつまる、ということは、考えているということですよ。とくに、多動の子どもの場合、「つまる＝考える」ことがどれだけすごいかは、私の臨床経験からも納得できます。多動の子どもの難しい問題にあたると、席から離れることも多いからです。そもそも、じっと考えることができれば、多動にはなりにくいですよ。考えることの大事さを見抜く村上先生の視点に、私はハッとしました。

もう一つハッとしました。私たちは、「できることがよい」というノロイにとらわれているんだとハッとしました。私たちの多くは、「できることがよい」と当たり前のように考えています。だからこそ、子どもが「 $18+3$ ができない」ことを目の当たりにすると、「できる」ようにしようと必死で考えます。

「できること」は大事です。でも、ノロイでもあります。なぜなら、「できること」とらわれ、縛られることで、子どもの「考える」という大事な姿が見えなくなってしまっていましたよね、私たち。

子育ても同じです。子どもの幸せを願うあまり、私たちは「できること」に縛られていることが多いように思います。私も、親として、わが子にできることが増えてほしいなあ、と思います。英語が話せるようになってほしい、友だちがたくさんできてほしい、背泳ぎができるようになってほしい……。でもでも、それだけだとノロイですよ、と、村上先生のエピソードは教えてくれます。

「できることがよい」というノロイは、子どもの素敵な思いや悩みを見えなくさせる可能性があります。「できないけど考えている」「できないけど頑張っている」「できるけど無理している」……そんな子どもの思いが見えなくなるのが、親子にとって実は一番怖いことなのかな、と思います。

「できる／できない」の手前で、子どもは何を願い、何を悩んでいるのか。ノロイをほぐして、そこを見つけるやわらかな視点をもちたいものです。そして、そのまなざしは、子どもに届き、子どもの心をやわらかくしていきます。

【引用】：Web日本評論（第1回）あなたの子育て、ノロわれてます!？
子育てのノロイを解きほぐすー発達障害の子どもに学ぶ（赤木和重）

もうすぐ運動会です。今年度は、私たちもこの「できることがよい」というノロイから解放されなければと思い、「年齢毎に同じことに取り組むというのをやめてみよう」ということになりました。子どもが自らやりたいことを選び、自分のやりたいことに自らの意志で取り組む、異年齢のグループで取り組みについて考える機会を作る。など、「できる・できない」とらわれすぎないで、子どもたちの意欲や努力に目を向けたいと思っています。